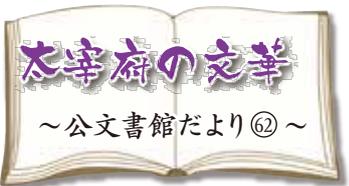


写真師利右衛門の悲劇

慶応2（1866）年9月3日、當時太宰府に居住していた写真師利右衛門が切り殺されるといふ事件が起きました。

乙金村庄屋高原謙次郎の日記（「稼亭抄筆二」）によると、怪しい技（西洋の写真術）を用いて民衆を惑わすので、天に代わって誅伐するという内容の「天民」を名乗る犯人による声明文が道に落ちていたといひます。また、延寿王院（現在の太宰府天満宮宮司西高辻家）の公的記録である「御用日記」の事件の翌日の記事には、この利右衛門が当時連歌屋町に住む医者木村仲淵宅に下宿しており、夜5ツ時（午後8時頃）に何者かに呼び出されて、何気なく門のところまで出たところ、すぐさま刀で深手を負わされたなど、より詳しい状況が記されています。当時の太宰府は五卿（尊攘派の5人の公家）が滞在しており、五卿の随従者や守衛を行う者、五卿を訪問する志士など多くの人々が行き交い、時に血なまぐさい事件も起きていました。

ところで、長崎の上野彦馬（幕末・明治期に活躍し、日本における写真術の開祖と呼ばれる人物）のもとで



修行し、慶応初年に太宰府の木村適齋の家に仮住まいして写真師として活動していた片宗権一が、薩摩浪士（福岡藩勤王派とする文献もあり）により殺害されたといふことは、すでにいろいろな文献で紹介されています（『都久志』4ほか）。

この片宗権一と利右衛門とは、尊攘派の志士に切られたこと、住んでいる家が一致すること（適齋は仲淵の息子）、そもそも日本における写真術の黎明期である当該期において写真師自体の絶対数が少ないことなどを考え合わせると、同一人物と考えて差し支えないでしょう。

ここで注目されるのは、現地の記録である「御用日記」の記述です。「只今のところにては一命に拘わり候ほどの儀は御座無く候」つまり、今のところ命に別条はないと述べています。もちろんこの後容体が変わり、結局死去したという可能性もありますが、実際には傷害事件が殺人事件として噂に尾ひれがついて広まったのではないかと考えられます。